

〔書 評〕

『農民革命』は農民に何をもたらしたか？

Chinese Village, Socialist State: E. Friedman, P.G. Pickowicz, M. Selden 著, Yale University Press, 1991;
Lao Peasants under Socialism: G. Evans 著, Yale University Press, 1990.

Philip Billingsley*

今世紀始めに、ある中国占い師は予言した。何十年も経たないうちに百姓たちは豚（中国語では猪、「朱」と同発音）と猫（「毛」と同発音）によって災い蒙るだろう。そして、半世紀後、朱徳将軍と毛沢東共産党主席の指揮する軍隊は政府軍を破って共産党の支配を全国に及ぼすことになったのである。社会主義の理想のもとに立てられたその政権は、それ以来数十年のあいだ、中国社会を一つの実験場にかえたのである。あと知恵になるが、その実験のうらには執念深い政治闘争も繰り広げられていたため、人々の日常生活は大混乱に陥とし入れられたのである。

外国人専門家の中国革命のいままでの評価はさまざまだが、およそだれもが同意するのは、農民たちには生活の保障と尊厳が取り戻されたということであったろう。「伝統文化はたしかに台無しになった、国の生産力はたしかに底をついた、知識人はたしかに脅えている。しかし、農民はようやく豊かな暮らしができるようになったのだ。」この確信には、残念ながら、何の根拠もなかった。共産党の許可なしで外国人研究者は村に入ることができなく、許可をえたとしても党の都合で選ばれた村にしか入れない。幸いに、最近の開放政策につれて外国人の研究者の入村要望がやっと認められ、その

* 本学文学部

調査結果（たとえばここで取り上げられている本のうち一冊）も徐々に発行されるようになったのである。この発展のうらには、しかし、現政権の指導者の恨み、つまり前任者の被害を受けた彼らの、その間違った政策のために国がどれほどの災いにあったのかということをも証明したい気持ち、が深く関係していることも言うておかなければならない。

中国革命以後、インドシナ3国（ベトナム、カンプチェア（元カンボジア）、ラオス）でも、相次いで同じ農民社会主義の理念に立つ革命運動は成功したが、ここもやはり外部へ流れる情報が少ないだけに、実情が理想化されてしまったのは避けがたいことであつたろう。ポル・ポト政権下のカンプチェアで敷かれた「キリング・フィールド」の実態が明るみにでたおかげで多くの人々は目からうろこが落ちたように目覚めたとはいえ、その国々もなお大体において中国同様に不透明で、我々の文化的無知は相変わらずなのである。インドシナ3国の中でもっとも知られていないのは恐らくラオスだが、ここでは、この書評が取り上げるもう一冊の本によると、少し違った経緯が認められるのである。というのも、それまでのさまざまな政権の合理化計画を台無しにしてきた文化的、地理的に分かれた多民族的社会に直面した社会主義政権は、適切な政策を探らざるをえなかった。

1979～80年に始まった「開放政策」を利用して中国の農村に入った一握りの西洋系研究者は、中国の著名な人類学者である^{フエイシヤオトウ}費孝通の「見えないものを求めよ」という助言に従って研究に乗り出したが、その研究の成果の中には、多くの予想外の発見も含まれていたのである。*Chinese Village, Socialist State* という本は、中国の農村状態の理想と現実の不一致を指摘することにおいて、いくつかの意味で重要な資料になると思われるのである。

まずとりあげるべきこととしては、ホンコンへ亡命した人々を対象にしたこれまでのほとんどの現代中国に関する農村調査と違って、著者たちは約10年をかけて一つの村の人々と直接対面しながら調査を行なったのである。舞台は、中心から遠く離れ、新政権の恩恵を受けにくい辺境の村ではなく、中国革命の根拠地の一つとして数えられる河北省の村であった。第二点は、

著者たち自身の履歴である。ベトナム戦争時代以後アメリカのアジア学界の保守性に正面から挑んできたかれらは、中国の社会主義政策を気ままに非難するおそれはなく、むしろ、中国当局側の「彼らなら余計な波紋を投げ掛けないだろう」というような安心感の許で入村許可が与えられたことも考えられないことでもないのである。残念なことに、かれらが描く現代中国の社会風景は、度重なる裏切りと失った好機の連続によって、共産党の存在理由自体を疑わせるものである。その裏切りの中でもっとも許されないのはやはり、あくまでも現実的な民族である中国人に夢を持たせておきながら、なおその夢を台無しにしてしまったことではなかろうか。

当の研究者たちが真っ先に感づいたのは、地方当局の偽りの話とインタビューやアーカイヴ資料による歴史の実績との矛盾であった。前者は、古い社会を否定し階級闘争のみを褒めたたえて、搾取されていた貧農層が地主に反乱して共産党が指揮する革命軍に身を投じ、その軍隊が立てた政権は集団主義政策によって被抑圧者に幸福と尊厳と安定をもたらした、とするものであった。実際には、地方の革命運動の実権を握ったのは旧エリートの代表であって、社会主義が農民にもたらしたのは、多くの場合には、幸福と尊厳と安定よりも、犠牲と苦悩と不安であったというべきものであった。30年代に共産党支部の創設に立ち会った若者の家系は、その後40年間も村の指導権を上から保証されながら儒教社会となんらかわりなくその村人を「子」と呼んで自分を「父」と呼ばせる風習をいつの間にか復活させたのである。にもかかわらず、50年代後半の「大躍進」の失敗で2000から3000万人が死に、生き残ったものはしばしば人肉食いで露命をつないだのである。それだけではない。古い社会では階級よりも家系の方のウェートが大きく、富と権力を享有するものはほんのわずかではあっても、自制を促した儒教の倫理に従って同じ家系のものを守る義務があったのに比べて、社会主義の世界ではそのようなつながらよりも上から勝手に付けられた出身階級のラベルがものを言う。しかも、封建主義社会に終止符を打ったはずの「働き者天国」にもかかわらず、いったん付けられたら、そういうラベルは子孫にまで引き継がれ、また、戸

籍法の定めで農村に生まれたものは農奴同然その住居を変えられないのである。ヨーロッパの暗黒時代を思いださせる一種の共産主義型封建制国家が誕生したのである。

さらに悪いことには、漸進主義より非妥協的闘争を重視し、「革命の頭目」としてその名を売ってきた毛沢東に無条件の忠誠を要求して来たこの社会秩序は、村のごろつきの役割を肯定したのである。というのも、古い社会ではおそらく匪賊の集団に身を投じたこの若者たちは、いまは民兵あるいは公安局に動員され、あいもかわらず村人をこき使うのである。本来は家父長制の価値観と経済不安定の絡み合いによって生まれるこのような現象が再び現れたことだけで十分な告発になるのだが、以前にそれぞれの家系の長老たちの指図に従ったこのごろつきたちは、いまは「共産主義革命の担い手」として制止し切れない存在となってきたのである。言い換えれば、20年間にわたった革命戦争の遺産は、マチョの価値観による日常的暴力を除去するどころか、それを肯定することに終わったのである。そこで老百姓たちが、不和や不安ばかりをもたらす現状にたいして、最近の報道が示すように古き良き時代の風習に訴えだしたのも無理もないことであろう。シャーマニズムや秘密結社やえせ皇帝の復活、それに膨大な費用を有する結婚式や葬式、若い女性を売買する奴隷市場の出現等々、古い社会の暗い裏の風習の粘りは、「共産党の努力にもかかわらず」というふうに思われてきたが、むしろ、「共産党の政策のためにこそ」といわなければならないであろう。

中国のみならず、アジアの国々で抑圧された農民の潜在的憤りを利用して政権を立てて来た共産党（あるいはそれに類似した独裁的政党）は、例外なくその農民の独立行動の範囲を少しずつ削ってきたのである。同じ怒りが自分らに向けられてこないための措置であったことは自明の理だが、さらに根源的な要素がその裏に隠れているような気がする。つまり、伝統的マルキシズムが唱える、社会主義は高度な産業資本主義基盤があって初めて実現可能となる、という説にもかかわらず、アジアの共産主義者は、原初的資本主義を象徴すると思われる自主的農民が圧倒的に多い国でもあえて社会主義政権

の樹立を試みる。したがって、その自主農民層の存在は一種の悪夢、つまり、マルキシズムが強要する高度資本主義段階を迂回して社会主義へ進もうとしているその異端を暴露する印しとして見えるのではなからうか。そこで共産主義政権は、その悪夢を葬るためにか、強制的にかつ急速に農業集団化に乗り出して来たのである。 *Lao Peasants under Socialism* という本は、ラオスにおける集団化政策の失敗を細かに分析することによって、農業を中心とする社会を操作せんとする共産主義の基本的誤謬を照らし出すだけでなく、国家権力への抵抗に関してもいくつかの示唆を与えてくれるのである。

1975年に行われたラオス共産主義の勝利は、農民の憤慨に起因したものより、インドシナ半島全体の戦禍から生まれた結果として見るほうがよいだろう。ラオスの農村社会は、新政権成立後、封建主義以前の段階にあると断定され、その基本的問題は農地の不平等な分配よりも後進的農業手段にあるとされたのである。中国の場合と違って、ラオスの新政権はすぐに社会主義へ移ろうとはしなかった。むしろ、農民たちが自発的に集団生活を始めるのを待つ姿勢をとったのである。その姿勢を変えたのは四年後の1979年に勃発したベトナム-カンプチェア戦争、そして当時ちょうど猛威をふるっていた数年間にわたる自然災害。隣国同士のを懸念し、また、自然災害にたいする十分な反応ができなかったことを困惑したあげく、ラオス政府はとうとう半強制的集団化運動に乗り出したが、それは何よりも、政権そのものの存続が脅やかされていると感じたからなのである。政府としては、農村における共同的慣習が集団化の導入を容易にすると考えたが、実際は、農民の非協力運動の結果、生産高が一割も減り、数十万人が国境を超え、タイに亡命を求めたのである。

集団化運動において、都会育ちで社会主義思想に染まったインテリに支配されるラオス政権が見のがしたのは、最低限の生活水準をかるうじて許す自給農業社会の共同慣習は、理想からではなく、必要から始まること、そして、その基盤となるのは階級意識ではなく、人間的つながりであること、であった。言い換えれば、集団化運動はそういう人間的つながりを持たない異家族

同士に共同して働く意欲をかき立てるために、ろばのはな先にニンジンをおぼらさげるかのように、労働単位で誘導しようとしたが、それは農村社会のしきたりを無視した試みの故にニンジンはかじられずじまいであった。どこの農業社会においても、生存と破壊の境界線をたどる百姓たちは、度重なる経験に学んだ結果、「よそ者の手による新機軸は総じて私腹を肥やすもので、われらのためにならず」と警戒するものである。ラオスの集団化運動のように、以前から狭い個人の独立行動の範囲をさらにちぢめようとする新機軸にたいしては、百姓の警戒心はなおさら強いものである。新しい技術の導入によって明らかな利得が生じる場合、例えば一家の収入があがるなどの場合は、伝統的生活の破産を忘れるかも知れないが、さもないと抵抗は避けられないのであろう。ラオスでは、隣りのカンブチアと違って合作社への参加はまだ各個人の判断にほぼ任せられたために、多くの農民は、不参加を選んだのである。

集団化運動がつまづいたいま一つの理由は、女性の土地所有権の問題であった。儒教の理念に染まる中国やベトナムとは対照的に、仏教国であるラオスの土地相続制度では新婚の夫婦は妻の両親から土地を受け継ぐことになっていて、女性の社会的地位の基盤がそこにあったのである。しかし、集団化以後には土地の管理は各合作社の運営委員会に委ねられた。したがって、中国とベトナムで所有権を完全に奪われていた女性が改革運動のために動員されやすかったのにたいして、ラオスでは、逆に、集団化にもっとも強く抵抗したのはむしろ女性であった。

中国やベトナムと違って専制政治の伝統を持たないラオスだけあって、政府がとった対策は、しかし、賞賛に値するものであった。集団化政策にたいする抵抗が膨れ上がるにつれて経済状況が徐々に混乱に陥るようになると、政府の指導者は転換策を選んだのである。低開発経済の民間部門と商業活動を廃止することは自滅行為に等しいと指摘したレーニンに学んで（中国共産党の指導者たちの多くはなおレーニンを読んでいないようだが）、かれらは国家社会主義固有の「コマンド・エコノミー」構想とそれに伴う強制策を放

棄し、市場社会主義への転換を正式に発表したのである。ところが、失策の理由は、やはり、官僚主義と一党独裁が必然的に生み出す問題点に求められたのではなく、零細生産者の「アナーキスティック」な労働スタイルのせいにもされたのである。レーニストがしばしば「戦術的譲歩」の名目で偽りの約束をしてきた歴史を振り返って見ると、ラオスの将来に影が落ちていないとはかならずしもいえないのであろう。政府と農村との関係が以前のどの時代よりも近いにもかかわらず、農民たちの警戒心は消えていない。ある村人が表明したように、「国家官僚は白米を味わい、老百姓は水稻で食いつなぐのだ」。

この2冊の本のいずれもがレーニン主義国家と農村社会との根本的矛盾を明らかにしたものであるが、同時に明らかになるのは、異なった政治文化が異なった解決策を生むという事実なのである。2000年以上の専制主義を誇る中国では、民衆の従順を確保するために、政治倫理の教義は上から下まで通達されて来たのである。そのような政治文化は、民衆の要求を逆方向へ伝える余地を残さず、リーダー崇拜を通じて大衆の総動員で政権の目標に達する方策をとる。帝政時代であれ、共産主義時代であれ、そうした方策はほぼ直覚的にとられて来たものである。集団化運動が困難を極めたとき、中国政府は、政策の是非を論じるどころか、広汎なテロと巧みな操作によってその方針をさらに徹底して来たのである。そして、政策が失敗した場合には、民衆の要求を伝達するパイプがないために、多くの人々が死んでしまうという悲劇が繰り返されて来たのである。それでも、最高権威に対する疑いを容赦できない中国の政治文化だけあって、たとえ大躍進後の飢饉で2000万人以上が死んだというようなケースでも、その死の責任を負うべき役人はほとんど罪を逃れて来たのである。ときの路線を過剰な熱心さでやり遂げたために大量の死を招致しても、それはまだしも許されるが、路線からの逸脱による失敗は致命的である。

ラオスはそのような息苦しい中央集権国家ではない。しかも、国内の交通網や通信網の乏しさ、そしてそれに由来する放散的経済構造もかさなって、

国家と国民の関係は中国よりはるかにもろいもので、共産主義の理想を民衆に強いることは問題外である。1950年代後半の中国のように、共産党が国民の苦情を黙殺して、「国は奇跡的に社会主義の段階に達した！」と一方的に宣言することなどは、なおさらありえないのである。ラオス政権は、そのような政治環境が存在しないために、よかれあしかれ、「社会主義への過度期」では、共同活動の種類を問わず一切を認める方針を取らざるを得ない状況に置かれているのである。その結果、自主農民層の日常的経済活動は、中国のように本質的にうさん臭いものとして見られるのではなく、国家が容認できる範囲内に含まれることになるのである。中国の悲惨な失策と比べて、ラオスは、「アジアのジャングリラ」とまでいかななくても、農村社会に社会主義の理想を導入する試みとしては、まずまずの成果をあげたとはいえるかも知れない。